

2025年1月12日 礼拝説教要旨

ヨハネによる福音書講解説教22「家族の再生」
出エジプト3：7～10、ヨハネ4：46～54

イエスさまは、この人の弱点を見抜いておられます。それはわたしたちの弱点でもあります。それが見ないと信じないということです。実際にあるかどうか自分の目で見て確かめなければ信じない。あるいは、結果が伴わないと信じない。結果が伴わないことがつまずきになってしまう。こういうことはよくあることです。教会に通ってもいいことなんか無い。ちっとも問題が改善されない。病気が治らない。それならもうやめた。でもそれは果たして信仰と言えるでしょうか。「信仰とは、望んでいる事柄を確信し、見えない事実を確認することです」（ヘブライ11：1）とあります。

この人は初めからイエスさまをカファルナウムまで連れて帰るつもりでした。「主よ、子供が死なないうちに、おいでください」（49節）としつこく食らいついています。とにかく手ぶらでは帰れない。意地でも連れて帰る。一緒に来て、息子の病気を目の前で治してほしい。でも、たとえイエスさまを連れて行ったとしても、あとで息子に言うでしょう。「お父さんがイエスさまを連れて来たおかげでお前は治ったのだ」と。救いを自分の手柄にするのではないのでしょうか。結果を見ないと信じないというのは、結局、神さまを信じるのではなく自分の行い、自分の努力や熱心を信じることなのです。

けれども、そのように自分の手柄として、何とかしてイエスさまを連れて帰ろうとするこの人にイエスさまは言われました。「帰りなさい。あなたの息子は生きる。」（50節）このイエスさまの言葉が、初めてこの人のうちに信仰を呼び覚ましたと言ってもよいでしょう。するとこの人は「イエスの言われた言葉を信じて帰って行った」（50節）のです。しつこくイエスさまを連れて帰ろうとした。その思いから離れて、イエスさまの言葉に任せた。イエスさまの言葉に息子の命を託した時に、その息子は癒されました。

カナからカファルナウムに下って帰る時、彼はまだ疑心暗鬼だったかもしれません。収穫なしとトボトボと帰ったのかもしれない。けれども彼は手ぶらだったのではない。彼は信仰という大きな収穫を持って帰りました。その信仰が命をもたらしたのです。「彼もその家族もこぞって信じた」（53節）とあります。その家庭に信仰という新たな命がもたらされたのです。

今日のところは、幾つかの鍵となる言葉があります。一つは「信じる」（ピステウオー）という言葉が3回、もう一つは「生きる」（ゾーエ）が同じく3回出て来ます。信じることと生きることが一緒に出てくる。それは信仰がその本来の命を呼び覚ますと理解することができるかもしれない。本来の命とは何か。「正しい者は信仰によって生きる」「義人は信仰によりて生くべし」と聖書にあります（イザヤク2：4、ローマ1：17）。正しい者、義人とは、道徳的、倫理的に正しい人ということではなく、神さまの御前に罪を赦され正しいとされること。神さまとの関係を正しくされることです。罪ゆえにわたしたちはその関係を壊していました。その関係が修復され、御前に正しいと認められる。そのために神さまは何をしてくださったか。それは自分の力、自分の功績でしょうか。そうではありません。そのために神さまはイエスさまをくださいました。

実は、ここにはもう一つの鍵となる言葉がある。「下る」(カタバイノー)という言葉が、これも3回繰り返されています。新共同訳聖書では2箇所しか翻訳されていませんが、原文では3箇所になります。「下る」は、ここでは高いところから低いところへ、カナからカファルナウムに下ることですが、ヨハネ福音書では、この言葉は信仰的にイエスさまが天から降るという意味でも用いています。「わたしは、天から降って来た生きたパンである」(6:41、51等)と繰り返しご自身が降る者であることを言われます。まさしくイエスさまはわたしたちのところに降ってこられ、やがてわたしたちの罪をすべてご自身が引き受けて十字架におかかりになりました。単にカファルナウムに下る以上のことをしてくださったのです。

この奇跡の物語は、ガリラヤのカナが舞台となっています。「イエスは、再びガリラヤのカナに行かれた。そこは、前にイエスが水をぶどう酒に変えられた所である」(49節)さらに最後54節でも「これは、イエスがユダヤからガリラヤに来てなされた、二回目のしるしである」とあります。これは明らかに最初の奇跡、あのカナの婚礼の奇跡を思い起こさせています。イエスさまは水をぶどう酒に変えられました。ぶどう酒はイエスさまが流された十字架の血を表しています。イエスさまがその命をもって、わたしたちの罪を贖い、そして三日目によみがえられて、わたしたちを御前に回復させてくださった。その本来の生きるべき命を与えてくださったということ。さらに今日のところでは、そのイエスさまを信じること、信仰がわたしたちを本来の生きるべき命へと導くことを伝えている。わたしたちの行いではない。熱心ではない。イエスさまの十字架とよみがえりの御業がわたしたちを救いへ、命へと導きます。

考えてみますと、カナの奇跡とこの役人の息子の癒しの奇跡、そこに描かれているのは不思議と家庭、家族なのです。カナの婚礼は、結婚する若い夫婦がいる。イエスさまの家族、母マリアもそこにおりました。そして今日の役人の家族の救いがここにあります。またその二つの物語の間には、サマリアの女性の話もありました。夫を五人も取り替える。家族が破綻していました。けれどもその女性が救われ、サマリアの町の人々も救われていく。それは新しい神の家族、教会と申し上げてよいと思いますが、そういう信仰の共同体をそこに見据えていると言えるでしょう。

加藤常明先生は、その説教の中でイエスさまは「その言葉によってこの父親を捕らえ、支えて、息子のところに帰した」と述べています。イエスさまによって癒されたのは、息子というより、この父親の方なのかもしれません。信仰によって新しく造り変えられ、新しい命を宿した者をその家族の中に帰す。そこがまた新たな信仰の家族を形成する。わたしたちもイエスさまによって新たな命を宿した者として、そういう役割を担っているのです。

天の父よ。わたしたちのこれから帰っていく場所が、信仰の交わりを作り、育む場所になるために、あなたはイエスさまを与え、その命を惜しみなく与えてくださいました。それによってわたしたちは新たに造りかえられ、よみがえりの命を生きる者とされました。どうぞわたしたちが帰っていくその場所において、また新たな信仰の交わりを形作っていくことができますように。主の御名によって祈ります。アーメン。